

「ホス。ピタリテイー志向」の農業実現へ

福島県の西部、会津盆地の中央に位置する塩川町は、町の中央を貫く国道二一〇号線とJR磐越西線によって北部の喜多方市（六キロメートル）、会津若松市（一二キロメートル）と結ばれている。

盆地特有の大陸性気候で冬季は「積雪寒冷地帯」となるが、二三八〇ヘクタールにおよぶ平坦で肥沃な農地を利用し、一〇アール当たりの平均収量六一八キログラムという高水準の水稲栽培を基幹として発展してきた。農家戸数一二八八戸のうち専業は一四九戸、兼業は一一三九戸と、兼業化が進んでおり、また、中核的農家の高齢化も目立つところから規模拡大や組織化による合理的農業経営の基盤づくりを最重点に地域農業総合整備計画の実現を急いでいる。

農用地の利用増進についても、集落単位の話し合いにもとづいて、地域の実情に応じた農業機械の共同利用、農作業の共同化、作付けの集団化などを地域ぐるみで推進、中核的担い手農家への農地の蓄積と農作業の受託を含めた規模拡大を進めてきた。平成五年からは、約一〇〇〇ヘクタールの農地に低コスト型水田大区画ほ場整備事業を導入しており、この事業とパッケージした県公社の集合事業が

成功した町として全国的に有名である。

その「仕掛人」ともいえる県公社の遠藤主査に案内され訪ねたのが、西鏡沼（にしよろいめし）地区の山田義人さん（四七歳）。遠藤さんとは、集合事業の実施以来刎頸の仲であるという。福島県全体の認定者数は、現在一〇〇二名（法人三三件）だが、そのうち七一名（法人一件）が塩川町の認定農家、山田さんはその「認定第一号」である。昨年、長男の貴司さん（二〇歳）の就農をきっかけに農業生産法人「やまだズ」を設立した。奥さんの洋子さん（四四歳）ともども三人にインタビューを試みた。

—「やまだズ」の経営規模は…

「所有地四・五ヘクタールと借入地一〇ヘクタールの計約一五ヘクタールです。町内では、最大規模だと思います。コシヒカリ、ササニシキ、ひとめぼれの水稲作が主体で約一三ヘクタールにプラス社中茶を七〇アール栽培し加工販売しています。加えて、約五ヘクタールの稲刈りの受託をしています。」

— 公社との付き合いは…

「ここまで規模拡大ができたのは、県公

社のおかげだと思っています。農地の話だけではなく、融資・税金など農業をめぐる相談はすべて遠藤さんに相談して決めています。なにより頼もしい相手です。集合事業による再配分で昨年一四〇〇万円（一〇アール当たり約一二〇万円）で取得した一・二ヘクタールの農地も保有合理化事業でした。利息二パーセント



(有)やまだズの社長山田義人さん



塩川町

会津盆地のほぼ中央に位置し、北は喜多方市と南は会津若松市に結ばれている。町の大部分は平坦地で、肥沃な土壌を生かした一大稲作地帯を形成している。



農地流動化の「仕掛人」県公社の遠藤さん（右）と塩川町農業委員会の湯浅主査

の「スーパーL資金」の制度があることも遠藤さんを通じて知りました。

また、借入地のうちの五ヘクタールも県公社の集合事業で面的な集積となっていますし、刈り取り受託も「農作業受委託促進特別事業」を活用し、経営に大いに役立たせています。まさに遠藤さままでです。

—山田さんは「ホスピタリティー志向の農業を追求しておられるようですが、それはどのようなものなんですか。

農業に従事して二十七年目になります。二四歳のとき、当時四七歳だった父が交通事故で他界しました。それ以来規模の拡大や生産性の向上などによって農業でも豊かになれるとの確信のもとに自己流でやってきましたが、病気で入院したり、失敗したりしたこともあって、地域の人たちからなにかと助けられました。そんなこともあって、不惑の歳を過ぎて、経済的合理性の追求と「リッチになるための競争」だけでなく、「ホスピタリティを重視した農業」を志向すべきではないか、という内なる声に耳を傾けねばという心境になってきたんです。

—具体的にいいいますと？

現在の経営地の拡大をはかり、生産性の向上と消費地とのネットワークを築きたいと考えていますが、その経営のなか

にいろいろな人たちが参加しやすいような仕組みを整備し、農業が自然環境を守り、食を通じていろんな人との文化の交流や相互の人間形成の役割を果たし、希望と誇りをもった地域密着の経営展開をはかりたいと思っています。

—ビジョンをもった経営の展開ということになると、管理がたいへんになってきますね。

現在の経営管理はまずまずだと思いますが、これからは自己資本率を高め、流動資産を増やす、などバランスを重視した発展方向に力を入れていく必要があると思います。農業従事の態様についても、これからは労働時間よりは労働の質と生産性の向上を重視していくつもりです。

—スーパーL資金の利用と関連して、経営改善の目標は？

ほ場整備終了後は土地の団地化をはかり、不耕起、直播なども経営のなかに取り入れるとともに、高能率、低コスト実現のための収穫調整施設や特産米の販売などに消費者の意向を反映させ、食のネットワークをつくりあげたい、そのための研究も積極的に進めるつもりです。

—そうした視点に立った新たな経営が早く実を結んでほしいですね。ご健康をいのります。

後継者の貴司さん（中）と山田さん夫妻

